

紹介

日本文化史研究

日本民族社会史研究

ドイツ社会民主党小史

藤原 宮

肥後先生古稀記念論文刊行会編

日本文化史研究

日本民族社会史研究

元東京文理科大学・東京教育大学教授肥後和男氏の古稀を記念した論文集が、『日本文化史研究』及び『日本民族社会史研究』の二冊の大冊にまとめられて、上梓されている。肥後氏は明治三十二年茨城県久慈郡大子町の生まれ、大正十年東京高等師範学校を卒業、三年間の教員および軍隊生活を経て、大正十三年京都帝国大学文学部史学科に入学、昭和二年卒業、滋賀県保勝会嘱託として、大津京址・崇福寺跡等を発掘調査され、昭和八年に東京文理大助教授兼東京高師教授として赴任し、戦後の公職追放による中絶はあるが、昭和三八年の定年

退官にいたられた。

肥後氏の学問的業績は、もとより多方面にわたるが、もっとも顕著な業績は、著書『日本神話研究』『古代伝承研究』『宮座の研究』などに代表されるように、日本神話・古代伝承や神社信仰の深い研究を通じて、氏独自の日本文化史を樹立されたことである。氏の門下から、本書に寄稿された民俗学・文化史の幾多の俊才を輩出したこと自体、氏の学問のきびしさをよくあらわしているといえよう。神話やイデオロギーの問題が、われわれの切実な課題となっている現在、肥後氏の業績は、あらためて深く検討されなければならない。今後ますます御壮健に、長寿をしまれんことをお祈りする次第である。なお、大津京址の発掘は、すでに昭和四年に報告書が公刊されているが、出土品は、京都大学文学部国史研究室に保管されていることを附記しておく。両書の収載論文は、何分とも多数にわたるので、以下タイトルのみを紹介する。

『日本文化史研究』

「尊」と「命」と「王」——「天皇」号の始

用期と関連づけて——

日本武尊

神代紀の異伝について

宮廷儀礼と神話の成立——日神を中心として——

奈良時代における律令仏教成立過程の一考察——例得度の成立をめぐる——

大畑 正一

舟ヶ崎正孝

大般若經書写に現われた仲麻呂・道鏡の相剋

須田 春子

関東古代寺院の研究——日向薬師の行基伝説——

鶴岡 静夫

曲舞の地理・歴史的研究——隼人舞・猿楽・能楽の潜流——

志賀 剛

五代帝王物語考——正元二年院落書・増鏡との比較——

外村 久江

創成期茶道の精神

花道史における展開期の問題——室町時代から江戸時代初期まで——

芳賀幸四郎

大井ミノブ

大河畔における宗教文化伝播の諸相——

中世利根川文化圏の一考察——

萩原 龍夫

近世史学の成立と林羅山

小沢 栄一

近世儒学者の時代区分論 渡辺 広

幕末・維新期の国学者の活動——とくに

明治維新における国学者の機能と関連

させて—— 芳賀 登

明治初期博覧会とその理念——旧筑摩県

下の博覧会を中心として——有賀 義人

〈日本民俗社会史研究〉

不具者崇拜の痕跡——インドと日本の比

較民俗—— 相葉 伸

民間巫俗の性格——巫女の口寄せと死霊

信仰—— 桜井徳太郎

日光修験の成立 和歌森太郎

尾張の祭雑考 熊谷 勉

両墓制の問題点について 佐藤 米司

兄弟分の民俗について 竹田 旦

日本海沿岸移民史の考察——東北地方の

場合—— 北見 俊夫

物部氏について——ニギハヤヒノミコト

降臨神話を中心として—— 宇野 幸雄

平安初期における律令中央官制の質的変

化について——撰関体制への移行を中

心として—— 大塚 徳郎

藤原実資の年中行事観について

鎌倉時代初期の守護と守護制度

宮城 栄昌

大饗 亮

近世における地方寺領の経営——羽州慈

恩寺領の研究—— 伊豆田忠悦

近世浜名湖畔村の生態——入出村六帖網

を中心として—— 松井 秀次

寛政改革と旗本領 若林 淳之

「芝村騒動」覚書 本村 博一

幕末の農兵隊 小林 茂

幕末維新期における譜代請西藩 小島 茂男

近代社会における立身出世主義について 福地 重孝

（日本文化史研究）A5判六〇八頁・年譜・

著作目録付・「日本民俗社会史研究」A5判

六七二頁・共に昭和四四年四月 弘文堂刊・

定価各三、八〇〇円）

（熱田 公）

W・アーベントロート著

広田司朗・山口和男訳

ドイツ社会民主党小史

百年間にわたるドイツ社会民主党史を概

観したものである。著者はマールブルク大

学の政治学教授で、西ドイツのいわゆるニ
ュー・レフトの代表的な理論家として知ら
れている人物だ。こうした著者の立場は本
書の叙述の随処に顔を出していて、日本語
にして二百ページ（本文）にも満たないこ
のドイツ社会民主党史の概説書をまことに
個性的なものにしている。

三月前期にまでさかのぼってドイツ労働
運動の始源に触れたのち、本格的な
概説の筆は、一八六三年のラサール派の組
織の設立からおこされている。そして叙述
の下限は、本書が発表された一九六〇年代
はじめの社会民主党の現状にまでおよんで
いる。しかし著者は、この間の百年の社会
民主党史をありきたりの均整のとれた概説
書の叙述方法でうわ撫するのではなく、
著者が重要と考える問題ではかなり思い切
った寄り道もしているし、また、それに関
連して著者自身の立場を率直に表白するこ
ともはばかってはいない。この点では、た
とえばヴァイマル期の社会民主党の左翼反
対派や宗教的、社会主義的グループなどの
動きを扱った部分が、とりわけ注目にあた